

# 浮嶋八幡・八幡石垣社・八幡竈門神社の仮面 『あまえご』について

小 野 一 郎

The Study of the Maske "Amaego,, in Ukishima,  
Ishigaki and Kamado Shrines.

## 目 次

### I 抄 録

### II 序 言

### III 考 察

#### (A) 『あまえご』について

- (1) 名 称
- (2) 名称の由来
- (3) 形の由来
- (4) 用 途

#### (B) 浮嶋の『あまえご』について

- (1) 浮嶋八幡について
- (2) 形体について
- (3) 額について
- (4) 眼辺について
- (5) 頬について
- (6) 鼻について
- (7) 口辺について
- (8) 顎について
- (9) 裏面について
- (10) 紐孔について

#### (C) 石垣の『あまえご』について

- (1) 八幡石垣社について
- (2) 形体について
- (3) 髪について
- (4) 額について
- (5) 眉について
- (6) 眼辺について
- (7) 頬について
- (8) 鼻について
- (9) 口辺について
- (10) 顎について
- (11) 裏面について
- (12) 紐孔について

#### (D) 竈門の『あまえご』について

- (1) 八幡竈門神社について
- (2) 形体について
- (3) 髪について
- (4) 額について
- (5) 眉について
- (6) 眼辺について
- (7) 頬について
- (8) 鼻について
- (9) 口辺について
- (10) 顎について
- (11) 裏面について
- (12) 紐孔について

#### (E) 結 語

### IV 参考文献

Tab. I 浮嶋八幡蔵仮面・寸法・計測・一覧表  
小野一郎計測

Tab. II 八幡石垣社 蔵仮面(男面)・寸法・計  
八幡竈門神社 測一覧表 小野一郎計測

Tab. III 八幡石垣社 蔵仮面(女面)・寸法・計  
八幡竈門神社 測一覧表 小野一郎計測

### 挿 図

- Fig. 1 写真 浮嶋八幡・正面景観  
2 // 浮嶋面・前面  
3 // 浮嶋面・右側面  
4 // // ・左側面  
5 // // ・右斜側面  
6 // // ・裏面  
7 // 八幡石垣社・正面景観  
8 // 石垣面(男)・前面  
9 // // // ・右側面

10	写真	石垣面(男)・左側面	28	〃	〃	・左側面図
11	〃	〃		原図実物 $\frac{1}{4}$ ×凸版 $\frac{2}{3}$	小野一郎原図	
12	〃	〃	29	〃	石垣面(男)・前面図	
13	〃	(女)・前面		原図実物 $\frac{1}{4}$ ×凸版 $\frac{2}{3}$	小野一郎原図	
14	〃	〃	30	〃	〃	・左側面図
15	〃	〃		〃	〃	
16	〃	〃	31	〃	石垣面(女)・前面図	
17	〃	八幡竈門神社・正面景観		原図実物 $\frac{1}{4}$ ×凸版 $\frac{2}{3}$	小野一郎原図	
18	〃	竈門面(男)・前面	32	〃	〃	・左側面図
19	〃	〃		〃	〃	
20	〃	〃	33	〃	竈門面(男)・前面図	
21	〃	〃		原図実物 $\frac{1}{4}$ ×凸版 $\frac{2}{3}$	小野一郎原図	
22	〃	〃	34	計測図	竈門面(男)・左側面図	
23	〃	竈門面(女)・前面		原図実物 $\frac{1}{4}$ ×凸版 $\frac{2}{3}$	小野一郎原図	
24	〃	〃	35	〃	〃	(女)・前面図
25	〃	〃		〃	〃	
26	〃	〃	36	〃	〃	〃
27	計測図	浮嶋面・前面図		〃	〃	〃
		原図実物 $\frac{1}{4}$ ×凸版 $\frac{2}{3}$				小野一郎原図

指 導

東京芸術大学 西 田 正 秋  
美術学部教授

I 抄 録

神社の祭礼時の神幸に使用される、『あまえご』と呼ばれている仮面について、民俗学的問題には多く触れず、人体美学の立場から計測し、顔面の美的効果の比較考察への、基礎資料としたものである。

II 序 言

浮嶋八幡の木彫仮面で、裏面に長享2年戊申9月20日の墨書銘と、作者玄祐法師の刻銘のあるのを計測した際、『あまえご』と呼ばれる一見怪奇な仮面が同社にあるのを知ったのであるが、図らずも私の居住地の氏神八幡石垣社と、近くの八幡竈門神社にも同名称の仮面があることがわかった。大分県下における『あまえご』の分布等の研究は、民俗学の方野に入るものであろうが、その原形と展開を人体美学の立場から、顔面の美的効果の比較考察としてとらえたいと思い、その手始めとして、浮嶋・石垣・竈門の各八幡蔵の『あまえご』について、計測調査したものである。

III 考 察

(A) 『あまえご』について

(1) 名 称

この地方の人々に『あまえご』と伝称されているもので、男面・女面各1面づつを併せてそう呼んでいるようである。浮嶋八幡蔵のものは現在は1面であるが、昔は男女各1面づつあったと、土地の古老は話している。

現存のものが男女どちらであるか不明であるが、女面の方ではないかとも云われている。

佐藤暁氏はこれに『甘え児』の字を当て、伊藤竜蔵氏は『阿麻』(女面)・『余護』(男面)としている。

内竈地方では『あまよご』と呼ばれている。『あまえご』・『あまよご』どちらが原形で、どちらがその転化したものであるかは、本論の論及外であるし、研究不十分なので後日の研究課題にしたい。本論では一応『あまえご』としておく。

(2) 名称の由来 不明

(3) 形の由来

目下のところ3社の収蔵のみであるので、その源流は不明である。石垣・内竈(以下八幡・神社を省略する)の男面は、狂言面・囃吹が転化したと思われる土俗面ひよっとこに似ている。(この狂言面・囃吹の土俗面ひよっとこへの転化については、東京芸術大学・西田研究室

・東裕子氏の貴重な研究がある。) 女面の源流は能面の小面の類かとも推察されるが、3社の仮面中一番古いと考えられる浮嶋八幡のものが1面しか現存せず、現存のものが同地の古老の説のように、女面であるにしても、余りにも他2社のものと異なっており、形の由来の推察も資料不足で早計と考えられる。

(4) 用 途

祭の神幸の時使用されるもので、浮嶋では現在使用していない。他の2社では使用しており、神幸の行列の中であって、幣のついた榊で先払いする(内竈)、塩水をまいて歩く(石垣)、店の品の飲食自由(浮嶋・石垣)など、各社でやや用途が異なっている。何れが原形か、或は他に原形があり、それが時代・地域によって、漸次変形され伝承されて来たものであるのか、仮面の源流を探る上にも重要な興味深い問題であるが、民俗学の問題であるので、諸賢の研究・教示をお願いしたい。

(B) 浮嶋の『あまえご』について

- (a) 所在 大分県速見郡日出町真那井
- (b) 所蔵 浮嶋八幡
- (c) 名称 あまえご
- (d) 作者 不明
- (e) 時代 不明
- (f) 由来 不明
- (g) 彩色 なし
- (h) 材質 桐
- (i) 重量 50g
- (j) 寸法 縦径225mm.×横142mm.×高さ(厚み・平均) 7mm. (その他各部分寸法は計測値一覽表参照のこと)

(1) 浮嶋八幡について(縁起書抜萃)

祭神仁徳天皇・皇后仲臣命・神功皇后・応神天皇・日本武尊・仲哀天皇祠は初め大神村真那井白山(或云城山)に鎮座せしを、中古今の海浜浮嶋に遷せしなり。故に浮嶋八幡と称す。創立縁起に就きては碩田叢史に次の如く見えたり。

宮伝云。人王八十二代後鳥羽院、建久九年成年長老闕名詣=干相州鶴ヶ岡八幡宮=太神託=長老=曰、我欲=垂=跡=於豊州=金鳩三羽有=喬木=者=心=鎮=我於其処、長老敬諾巡=回豊後、到=真那井、金鳩有=松枝、於=是=勸=請鶴ヶ岡八幡、其遷行幸古路不=生=竹木、見者奇=之、宮之処在=浮嶋之西白山、国俗曰、帆船過=社前=則必覆矣、故中古遷=於今浮嶋。

同八幡縁起書に、建久の頃四国の沙門転法長老鶴ヶ岡に巡礼して一千日法華經を読む。一夜神長老に託して曰、我諸国に分神して有縁の衆生を度せんと。於茲長老

建久九年九月廿日真那井に勸請す。曆仁元年二月社頭荒廢に及び大友親秀修復し、建治三年十月再び荒廢に及び大友頼泰之を造替すと。同村白山古宮の辺を長老ヶ鼻と称し、尚長老墓と称するもの同所に在り。中古里民基部を穿ちて石櫃を得たりしも櫃の内部悉く朱なりしより、穿者驚きて素の如くせりと。

(2) 形体について

仮面の論郭を見ると、左頬のcurveが右頬のそれに比してやや強いが、ほぼ倒立卵形である。不器用に左右不揃いに打ち抜かれた両目、への字なりに曲げた口から2本欠けた上歯列がのぞいている。使い古された黒褐色のこの仮面からうける印象は、面打ちの巧拙をのりこえて無気味であり、むしろ技術の稚拙さがその効果をより助長している感じすらする。土地の古老の説のように、これが女面であれば、この仮面と対であった失われた男面がぜひ見たくなるが残念である。何時頃からかこの地方で、顔の不細工な人を指して『あんしはあまえごんごちある』(あの人はあまえごのようにおかしな顔をしている)と呼んでいるという。年に1度の祭礼に登場するこの仮面の印象の強烈さと、人々の親近感が、このことばの中に偲ばれる。以下各部位の考察を進めよう。

(3) 額について

側面から見ると眉弓部から頭頂へかけての仮面の外縁のcurveは直線に近く、前面から見ると、眉弓部で突出し額は斜に後退している。その額へ4本の皺がほぼ同間隔に、正中線附近で少し巾広い凹部を作るようなcurveで、浅く事もなげに刻まれている。能面などに見られるように様式化されたものでなく、皺という概念で刻まれたものであろうが、正中線附近をほぼ水平にして、左右外上方へcurveを描いているところなど、或は手本があったのかも知れない。かなり突出した眉弓部に、眉毛らしいものが右5本・左6本眉頭部より左右外下方へ、不揃いにごく浅く刻まれている。欠けた前歯と併せて、眉をそり落した老婆の風貌を与えるが、前述のようにこれが女面であるという確証はない。

(4) 眼辺について

水平位で右目より下った左目、そして左右とも所謂下り目であるが、この仮面の目は下り目の1つの特徴である柔らかな感じはない。勿論これは眼球の虹彩部または瞳孔部だけでなく、瞼裂全部がくりぬかれていること、そして前歯の欠けた口辺の表情等、顔面の他の部分の表現とも関係をもつものであるのは云うまでもない。上眼瞼と球面との落差を表現したつもりか、或は二重瞼の表現か、右目では内眼角から外眼角へ、左目では上眼瞼の中央辺から外眼角へ、僅かではあるが一段、段がつけられ、後は不器用にえぐられている。両目の形もかなり不

揃いで左右非対策であるが、これは何等かの手本があり、それを模したと云うよりは、面打ちの稚拙さから見て、技術の未熟さから来たものかも知れない。それがこの仮面の怪奇な表情表現の1つのPointである眼辺表情に、作者の非意図的な事後的の表現効果をもたらしているのではなからうか。

(5) 頬について

側面から見ると鼻翼両外方にややふくらみを持ち、その辺から顎にかけて、左右3本づつの浅い鼻唇溝らしい皺が刻まれている。ここでもその *irregularization* がかえって顔面の表現効果を助けていると考えられるが、このように考察することは、能面の典型的な整備した美に対し、土俗仮面等のもつ稚拙・素朴な美とでもいうものを、余りにも強調することになるであろうか。

(6) 鼻について

仰置して側面から見ると、鼻梁が殆ど水平で鼻尖に至っているが、これは着面して動作した永い年月の間に、鼻の前面が木目に沿って磨滅または剝離したものと考えられる。両鼻孔が鼻下面後方で、僅かではあるが結合しているのは、拙劣な技術のため打ち欠いたものであろう。

(7) 口辺について

口の形は能面・老女のように、両口角を下げ、ほぼ水平に近い下唇と、それに対し弧を描く上唇との間に、切歯状の上歯が6本見え、口が僅かに開かれている。歯列は切歯・犬歯・臼歯等の区別はなく、全部切歯状で、上顎右側第1切歯・同左側第2初歯の2本が欠失しており、その基部断面よりみて、これは表現効果上当初より欠いて表現したものと考えられる。もしそうであるとすれば、この仮面の由来・名称等を考察する上で1つのpointになるのではあるまいか。下唇の正中線より右よりに、上下に2本浅いのみ跡があるが、これは受け口のように突出した下歯を表現しようとしたものか、2本の溝を刻んだ後、下歯を下唇との関係の不十分さに気付き、そのまま止めた、下歯とも下唇ともつかない、中途半端な表現なのかかわからないが、この仮面における口辺表情の占める位置は大きく、目と共にこの顔面表情を決定する大きなpointとなっているので、作者もその表現効果を意図したものであろう。

(8) 顎について

前面から見ると、左がややふくらみを欠いている。頬から顎・頤端へかけての輪郭線が、能面の小面・万媚などに見るふくよかさを持たないのは、この仮面の年令的に老令者としての表現を、考慮したものであろうか。側面から見ると、下唇より下降した線が上昇し、頤端附近で下唇とほぼ同じ高さ（仮面水平仰置位置として）にな

って、所謂しゃくれた顎になっている。

(9) 裏面について

仮面は5~8mm.の厚さで、裏面はただ雑然とえぐりすいたという感じで、この仮面作者の位置を暗示するものようである。

(10) 紐孔について

紐孔は仮面上部より、約90mm.辺の両目外方に無雑作にあげられている。

(C) 八幡石垣社の『あまえご』について

- (a) 所在 大分県別府市北石垣中須賀
  - (b) 所蔵 八幡石垣社
  - (c) 名称 あまえご
  - (d) 作者 衛本氏（別府市不老町(旧称)
  - (e) 時代 昭和14年（1939年）
  - (f) 由来 不明
  - (g) 彩色 あり
  - (h) 材質 桐
  - (i) 重量 男面 200g  
女面 100g
  - (j) 寸法 男面 縦径192mm.×横147mm.×高さ（厚み・平均）10mm.  
女面 縦径195mm.×横130mm.×高さ（厚み・平均）5mm.
- （その他、各部分寸法は計測値一覧表参照のこと）

(1) 八幡石垣社について（縁起書抜萃）

宇多天皇の寛平年間、信濃国諏訪の人手塚氏が温泉治療のためこの地を訪れ、この所の長である吉富主計の家に留まり、本国に帰る際「汝の是れまで数日の厚意有難しとて一封の包を取り出し是れは汝に來世の形見に授け置くなり此の中に納めたる一封は兼ねて仕奉る、諏訪大神の御霊代なり此の神を神体と尊敬し汝此の神の祝となり此の邑の鎮守と齋き祭らば汝の家は元より此の邑盛んに繁榮すること、諏訪大神の加護なり」と其の御守りを残して行った。それより此の御守りを神体として此の邑の産土神とし、今石垣宮と尊敬奉仕するのは此の神である。

(2) 形体について

男面は土俗面のひよっとこに似ており、女面は能面の小面系統のくずれたものといった感じである。裏面に不老町・昭和14年・衛本作とあり、作者・時代ともはっきりしている。伝え聞くところによると、衛本氏は既に亡く、人力車夫をしながら趣味で仮面を彫っていたことである。おそらく仮面が破損したので、衛本氏に依頼して打ってもらったものと考えられるが、八幡石垣社

に伝えられていた仮面によって、忠実に再現したものか、ひょっとここに似た面、女面ということで、衛本氏の創作したものか、私の一番知りたいこの辺の事情が、不明なのは実に残念である。

男面・女面とも頭頂はほぼ直線に近く表現されており、長方形の材の角を落してそのまま面を打ったという、ごく素朴な感じをその全体の形状から受ける。桐材を彫った上に和紙をはり、胡粉地塗りの上に着色しているが、全体として描くことによって、彫るところを補ったという、やや立体感の稀薄さを感じる。

(3) 髪について

(a) 男 面

髪を輪郭で見ると、正中線附近を凸部として、ゆるく左右外上方へ curve を描いて12~21mm.位の中で頭髪が墨で描かれ、側頭部は22~25mm.位の中で墨描きされ、両目外方辺で終わっている。至極概念的な touch で、特別様式化されているという感じでもない。

(b) 女 面

髪の輪郭は仮面の正中線頭頂附近から、左右にほぼ直線で斜降し、額の左右中心辺で accent をつけ、今度はゆるやかな curve をもって下降している。側面から見るとその下降線は、紐孔の上部で一度終り、また紐孔をはさんでその下方から、鼻下面の両外方辺の頬へかけて、半円に近い形の髪が描かれ、墨で平塗りされた上に、やや濃い墨でかき起されている。これらの髪の内方にごく荒い touch で無雑作に、1, 2本の太い髪毛がほつれ毛のように、前述の髪の輪郭に沿って描き添えられている。紐孔辺で一度束ねられた、みずらのような髪容が想像される。

(4) 額について

(a) 男 面

右眉上方の額に径35mm.位の、こぶ状のほぼ円形の突出物があり、うすい朱色で前額の肌色と区別され、彩色されている。口を極端に左に曲げているために、balance 上ここに、このようなこぶ状のものをつけたとも考えられるが、その表現効果等については、ひょっとこ面、または類似仮面を各時代各種収集した上で、後日更めて研究したい。着面動作のためか、こぶ状の前額は殆ど剝落している。

(b) 女 面

特記することもないが、前面から見ると、髪容のため額が鈍角三角形状で、正中線上前額髪際下方附近が剝落している。

(5) 眉について

(a) 男 面

八の字形の眉は眉頭から下凹状に外方に進み、眉角に

至って外凸状に降りており、眉頭からはねられた筆勢を、押えるかのように描かれ、この両者で眉を形成し、左方は殆どその末端が外眼角に接している。この薄い青墨調の眉毛の上に、濃い墨で右5本、左7本の眉毛が描き重ねられている。右眉端附近は剝落している。

(b) 女 面

やや八の字形に、男面と同様薄い青墨調の眉毛上に、左右2本宛の濃い眉毛が描き重ねられている。手勝手によるものか、左右とも右から筆が打ち込まれ、毛流などを意識した touch ではない。左眉の眉頭・眉端に剝落がある。

(6) 眼辺について

(a) 男 面

眉弓よりかなり凹んだ位置に、上眼瞼縁の弧線など、不揃いな左右の目が彫られ、虹彩がえぐられているだけで、上下眼瞼はこげ茶色で描かれている。上下眼瞼の交点を推測して目の巾を見ると、左右とも約52mm., 虹彩孔の径は約12mm.である。不器用にくれた虹彩縁は、青色で縁取りされており、鞏膜はややうすい肌色で。顔面の色と区別されている。両虹彩とも上眼瞼からは離れ、下眼瞼とは接しているが、眼辺の美的効果を考えてのことであろうか。

(b) 女 面

ほぼ男面と同じ要領で刻まれているが、虹彩のくり方は雑で、左虹彩は上下眼瞼を切ってはみ出している。白眼と俗称される鞏膜の部分は白く塗られ、その中央辺で横に溝が刻まれているが、何を狙ったのかよくわからない。上下眼瞼はこげ茶で描かれ、上眼瞼縁を表すそのこげ茶の線の下方に、それに接して青線が眼球をはさんでひかれ、両眼角には朱がさされている。男面のように眉弓から目への落差はなく、所謂はれぼったい上瞼など、全体として粗雑な仕事ではあるが、男面に比較して多彩なのは、やはり女面のためであろうか。

(7) 頬について

仮面全体の彩色を見ると、大体、所謂肌色であるが、女面の方が少し黄味を帯びている。

(a) 男 面

口を左に曲げているため、左の方が右よりややふくらみを持ち、額のこぶ状のものよりやや薄い朱が、両頬にはかかっている。

(b) 女 面

男面より少し強い朱が両頬にはかれ、周囲はぼかされている。右頬中央辺に長形状の剝落がある。

(8) 鼻について

(a) 男 面

前面から見ると、鼻梁はほぼ正中線の方角なのに、左

へ曲げた口との関係上、左の鼻翼・鼻孔を右のそれより上げることにより、鼻を曲げた恰好にしている。側面から見ると、鼻根部分から鼻尖へかけての鼻梁の curve など、浮嶋八幡のそれに似ているが、ここでは磨滅し変化した形ではなく、当初からこのように押しひしがれたように作ったものである。鼻根部に水平に2本引かれている皺は、ただ描くことにより表現されている。このような鼻の形体、deformation 等については、今少し同類仮面を収集した上で考究したい。鼻尖附近は点々と剝落している。

(b) 女 面

側面から見たこの鼻は、鼻梁から鼻尖へかけて、凸弧状の僅かな curve を持っている。鼻尖部の剝落がかなりひどく、生地 of 桐材が露出しているが、着色の順序など研究する上では好都合である。

(g) 口辺について

(a) 男 面

左へぐっと曲げた口辺表情の研究はこの仮面研究中の主要な point であるが、同種仮面との比較研究不十分のため、これも不本意ながら後日の研究課題として残し、ただ観察程度にとどめておく。

鼻の巾(鼻翼間最大巾)より少し広い巾の口を、下凸弧状にごく浅く刻み、まるで舌でも出しているように、その左口角辺をすぼめた口を刻んでいる。彫刻したというより、むしろ描いたと云った方が適当と思われる絵画性の強い口である。普通の状態での口と、左へぐっとすぼめて突き出した時の口との、同存化表現とも云えるのであろうが、その美的効果には疑問もあるし、作者の意図も不明である。ぐっと突き出した口の外方を、左鼻翼下端から鼻唇溝が curve を描いて、次第に浅くなり、顎端上10mm.位の正中線上附近で消えている。この溝を補うように、薄い茶色で全体に隈取りがされている。なおほぼ人中に挟まれて左右に5mm.×10mm.位のひげが描かれている。すぼめて突き出した口の周囲は、突出部のため剝落している。

(b) 女 面

鼻の巾より狭い巾の口は、西田教授の云われる乳児化表現であるが、その proportion の適否は別としても、この仮面の表情をやわらかく、和ませて、つつましかかに見せていることは確かである。

(h) 顎について

(a) 男 面

前述したように全体の形体から見て、四角の材の両角を少しとったという感じで。顎端はほぼ直線である。側面から見ると、口と顎端のほぼ中間で少し突出しているのは、左鼻翼から curve を描く鼻唇溝の末端附近と、口

唇を突出させるために刻まれた、丸味をもった浅い溝とに挟まれたところが、川の中洲のように凸部になったところである。

(b) 女 面

特記することもないふっくらした形である。男女面とも点々と剝落がある。

(i) 裏面について

裏面を見ると眼のくり方など、ささくれ立った感じで、技術的にもまずく、全体にただすきとったという荒さが目立つ。写真では判然としないが、ごく浅い彫りでそれぞれ次のように銘が刻まれている。

(a) 男 面

上部に左より右へ不老町(注・別府市内の旧町名)、右目外方に上下へ14年、左目外方に衛本作とあり、仮面の厚みは9~11mm.位である。

(b) 女 面

上部に左より不老町、右下鼻孔外方に上下へ昭年14年、仮面下部に右より左へ衛本作とあり、仮面の厚みは約5mm.である。

(ii) 紐孔について

どちらもただ紐を通す程度の粗末な孔が、下記の位置にそれぞれある。

(a) 男 面

頭頂より約83mm. 下方で、仮面仰置の水平面より孔の中心が約8mm. の高さの位置。

(b) 女 面

頭頂より約80mm. 下方で、仮面仰置の水平面より孔の中心が約8mm. の高さの位置。

(D) 八幡竈門神社の『あまえご』について

(a) 所在 大分県別府市内竈亀山

(b) 所蔵 八幡竈門神社

(c) 名称 阿麻余護

(d) 作者 男面 不明

女面 官森松平氏(別府市亀川本町)

(e) 時代 男面 昭和5年(1930年)

女面 昭和41年(1966年)

(f) 由来 不明

(g) 彩色 あり

(h) 材質 男面 樟

女面 桐

(i) 重量 男面 270g

女面 200g

(j) 寸法 男面 縦径212mm.×横149mm.×高さ(厚み・平均)8mm.

女面 縦径218mm.×横148mm.×高さ(厚

み・平均) 7 mm.

(その他各部分寸法は計測値一覧表参照のこと)

(1) 八幡竈門神社について (縁起書抜萃)

仁徳天皇之時有勅曰、後豊州速見郡竈門莊龜山者、日本武命及神功皇后西征之時、造<sub>二</sub>行宮<sub>一</sub>、徵兵之地、宜<sub>二</sub>崇敬潔祀<sub>一</sub>、於是如降三十三神既国常立尊、天照大御神田心姫命湍津姫命市杵島姫命素盞雄祀天忍穗耳命天穗日命活津彦根命天津彦根命榊樟日命底筒男命申筒男命表筒男命天兒屋根命天太玉命武甕槌命建御名方命宮簀姫命大山祇命加茂別雷命大山命経津主命天照大御神荒魂丹生都姫命鹿坂皇子忍熊皇子豊姫命金山彦命、称曰。聖武天皇神龜四年丁卯三月十五日仲哀天皇、応神天皇靈從<sub>二</sub>豊前菟狭<sub>一</sub>、降<sub>二</sub>臨于竈門莊宝城峰<sub>一</sub>、此日於<sub>二</sub>山麓<sub>一</sub>見<sub>二</sub>一白髮老翁<sub>一</sub>、長丈余、髭鬚二尺許、状貌異常自称<sub>二</sub>大神比義<sub>一</sub>諸男及土人迎祭<sub>二</sub>二神于尾興峰<sub>一</sub>、既而降<sub>二</sub>臨龜山<sub>一</sub>、懸<sub>二</sub>桜樹枝上<sub>一</sub>、(今時三月十五日称桜会祭蓋始于此)忽變爲<sub>二</sub>白髮老翁<sub>一</sub>、威靈赫々不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>仰諸男命畏伏敬拜、深念默禱者三日、夜時有冥託、於<sub>レ</sub>是始配<sub>二</sub>竈門宮<sub>一</sub>祭<sub>二</sub>于殿中央<sub>一</sub>、嵯峨天皇時藤百合稚、献<sub>二</sub>九町八反<sub>一</sub>以爲<sub>二</sub>祀田<sub>一</sub>、淳和天皇天長三年丙午三月十五日迎<sub>二</sub>神功皇后神靈于菟狭<sub>一</sub>又配焉、遂称<sub>二</sub>竈門八幡宮<sub>一</sub>、此時置<sub>二</sub>社僧<sub>一</sub>神宮寺末寺長福寺・光明寺・自応寺・他応寺・観音寺・養徳寺皆真言宗也、自<sub>二</sub>宇佐坊中<sub>一</sub>来八月十四日放生会三日二夜、此祭七坊共行<sub>レ</sub>之、建久七年丙辰大友左近将監源能直受<sub>二</sub>封豊後<sub>一</sub>、崇<sub>二</sub>信此神<sub>一</sub>、祀田尚如<sub>レ</sub>元正治元年巳未復<sub>二</sub>祀田九町八反<sub>一</sub>、(此謂<sub>二</sub>祀田<sub>一</sub>、蓋先<sub>レ</sub>是吉酉所<sub>レ</sub>奪、然今不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>考)大興<sub>二</sub>東浜行幸儀<sub>一</sub>(東浜今二本松是也)其八幡大神與三及三十三神々與一云、明德二年辛未三月初属<sub>二</sub>神祇伯白川殿<sub>一</sub>、天正十九年辛卯大友氏没<sub>二</sub>収祀田<sub>一</sub>、於<sub>レ</sub>是東浜行幸儀寢、元和元年乙卯六坊壞廢、独神宮寺存焉、同元年五月豊前小倉城主細川氏所領之時憂<sub>二</sub>本社衰頽<sub>一</sub>、復<sub>二</sub>于旧領往昔<sub>一</sub>、隸<sub>二</sub>此許<sub>一</sub>以奉<sub>二</sub>祭祀之民戸<sub>一</sub>不<sub>レ</sub>詳<sub>二</sub>幾何<sub>一</sub>、相伝以爲<sub>二</sub>竈門一莊<sub>一</sub>矣、(蓋係<sub>二</sub>竈門莊<sub>一</sub>爲<sub>二</sub>九村<sub>一</sub>、竈門野田小坂古市龜川平田北鉄輪南鉄輪小浦)而中古以降奉祀者五村、曰内竈門野田古市龜川平田及鉄輪、大井手川以北附焉、毎年祭祀二月十五日、三月十五日、六月廿九日、十月十五日十一月初卯日、明治四十年改正二月廿三日祈年祭、四月十五例祭、七月廿九日夏祭、十一月十五日秋祭、十一月廿六日新嘗祭、十二月十五日冬祭其他一日、十五日、月次祭執行、寛延三年庚午扁額磨滅龜川莊屋高橋奥右衛門神祇伯請于雅富王更時之、古文書古器物遇<sub>二</sub>大友氏之乱<sub>一</sub>概焼燼云。

(2) 形体について

八幡石垣社のそのように男面は士俗面のひょっとこ

に似、女面は能面『小面』系統のものが手本になったものと思われる。裏面の墨書銘によると男面は昭和5年の制作であり、石垣のものより約10年古く、作者は不明であるが、石垣のものよりは技法的に巧者の手に成ったもののである。木彫・苧粉地塗りの上に着色してあり、彩色も石垣のものより濃く茶味を帯び、頭髪はない。女面は昭和41年前仮面紛失のため、神輿造り等をする宮森氏が打って奉納したもので、作者は現存しており、美術批評等とはいささか立場が異なると思われるので、女面の美的効果について批判的なことには本論では触れず各部の説明だけに止めたい。女面の彩色は lacquer 状のものが使用されており、他面の顔料と異なっている。総代の話では前の女面はもう少しふくよかであったそうである。

(3) 髪について

(a) 男 面

頭髪はない

(b) 女 面

正中線辺から内方へゆるい curve で、左右ほぼ同じように髪が描かれ、側頭線辺で今度は直線となって、鼻翼外側方で終っている。これが頭髪の out-line であり、lacquer 状の塗料で平塗りされている。この out-line の 2 箇所 accent から、浅い溝が外下後方へそれぞれ刻まれている。

(4) 額について

(a) 男 面

着面動作のためか、仮面頭頂辺はかなり剥落している。皺はないし石垣面のようなこぶ状のものもない。

(b) 女 面

特記することはないが、狭い感じの額である。

(5) 眉について

(a) 男 面

眉弓から上方へ離れて八の字形に、眉頭から眉端へ行く程太く、毛流が描かれており、上眼瞼から外上方へ向かう毛流は描かれていない。左眉の眉端は剥落ではっきりしない。

(b) 女 面

三日月形の眉がべたりと抑揚なく平塗りされており、左眉頭辺が破損している。

(6) 眼辺について

(a) 男 面

右眉弓が左眉弓に比して、しのぎが強く、右目は見開いたように丸く、左目は外眼角の下った下り目である。左右眉弓の彫り方と、左右目の表現の相違との関連性は、この作者の意図したものであろうが、顔面下半部との有機的関係において、今一息緊密度に欠ける感じを持つ

ものである。上下眼瞼には絵具がさされ、目の存在を明瞭にしている。両眼球辺は突出しているためか、著しく剝落している。

(b) 女 面

ごく浅く二重瞼を刻み、その上を黄土色で彩色している。くり抜いた虹彩の縁も同色で縁取りし、上下眼瞼と特に両眼角を巾広く着色している。左眼球は上下眼瞼で切られ、右眼球は歪んだ円形である。鞏膜部は中央辺を左右に、しのぎ立った稜が走り、側面から見ると逆V字型をしている。

(7) 頬について

(a) 男 面

左頬の鼻唇溝の外方をほぼそれに沿って、やや巾広い浅い溝が彫られている。稜は丸っこくしのぎは立っていない。口を左上方へ曲げたためか、右頬にはそのような溝はない。左目下方から鼻唇溝に沿った凸部は、細長く剝落している。頬から頤にかけての curve を見ると、右頬は左頬に比してゆるやかで、口と関連した movement を出している。

(b) 女 面

石垣面のように朱の彩色もなく、鼻翼外側方で右が左に比して、ややふくらみを持っている。

(8) 鼻について

(a) 男 面

ほぼ正中線方向の石垣面に比して、鼻梁が心持ち右へ傾き、左鼻翼・鼻孔が右のそれより上っている。鼻梁が左へ傾斜し、左鼻翼・鼻孔が上るのが、有機的動きであるのに、その関係を逆にして一層の movement を出そうとした意図かも知れないが、中途半端な表現に終わった感じである。鼻根部の2本の横皺は、ただ描いただけの石垣面に比して、これは浅い段をつけて刻まれている。

側面から見た鼻梁の curve は、石垣面と似ているし、鼻梁から鼻翼への落差も殆どないような、おしひしがれた形も似ている。鼻孔の径は左右とも約 10mm. 位で、鼻尖部・鼻翼はかなり剝落している。

(b) 女 面

鼻梁が正中線よりやや左に傾き、鼻と頬との境が、正面向きの浮世絵の美女の鼻の線のように、はっきり見える。側面から見ると鼻梁が殆ど直線に近く、肉の薄い鼻で、鼻孔は左右不揃いで、右は四角形をしている。

(9) 口辺について

(a) 男 面

口は左口角を斜上方向に移行してすぼめた形で彫られており、口唇は黒みを帯びた赤い朱で、唇の周囲 2mm. 位はみ出してぬられている。口の彫り方が小さすぎたため、彩色で少しでも大きく見せようとしたのか、彩色の不手際か、よくわからない。この口を包むように鼻唇溝

が、大きな curve を描き、その内方にも浅い溝が刻まれている。前述したようにこの口の美的効果の研究は後日にまわしたい。人中を挟んで口ひげが、右から左への touch で線描きされている。口唇結節辺、上唇、下唇中央辺は剝落している。

(b) 女 面

朱で彩色され、開かれた上下唇の中に、黒くぬられた上顎の6本の切歯状の歯がのぞいている。なぜお歯黒のようにしたかは不明であるが、能面の小面も鉄漿をつけた趣きにしてあるから、その名残りかも知れない。鼻下面・上唇間がかなり開いている。

(10) 顎について

(a) 男 面

頬から顎へかけての輪郭線は、前述したように、左廻りの方向への movement を出そうとしている。下唇下方から頤端へかけて、上下方向の touch であごひげが描かれているが、浅く消失しかけている鼻唇溝の末端附近の凸部にはない。凸部のため着面動作の折に、消されたのであろうか。現状だとこのひげの占める位置は小さい。当初からこのようであったか、或はもっと強く描かれていたのか、このあごひげの美的効果についても、同類仮面収集の上後日考究したい。

側面から見て、顎の curve と比較して、下唇から頤端への curve がゆるやかなのは、引き上げ歪めた口の効果を出すために、ここの肉をそいだ表現であろうか。鼻唇溝末端は剝落し、頤端は生地の樟材が露出している。

(b) 女 面

やや右へ曲っているが、他に特記することもない。仰置して側面から見ると、輪郭線は下唇から下って、後は殆ど一直線に頤端へ行き、小さい curve で曲り、殆ど垂直に落ちている。四角い材の角に丸味をつけただけという感じである。

(11) 裏面について

(a) 男 面

上部右に氏、左に神とあり、この2字の中間に、それよりやや小さい文字で右から縦書きに、昭和・竈門宮・5年と3行に墨書銘がある。虹彩孔は丸のみで左まきにすかれ、渦巻いた花の形のように見える。後はただすいた程度であるが、他の4面に比して丁寧である。前述したように全体の形が、右から左へ歪んでいるのが、その輪郭線で判明する。仮面の厚みは約 8mm. である。

(b) 女 面

両眼の中央上部に縦に奉納と大書し、右目外方に昭和四十一年四月十五日、そして一段下って製作人宮森松平と縦書きし、左目外方に別府市亀川本町二組、その中辺から宮森松平と2行に縦書きされている。仮面の厚みは約7



浮嶋八幡・八幡石垣社・八幡竈門神社の仮面『あまえご』について

mm. すき方は雑である。

(12) 紐孔につて

簡単な孔が下記のようにそれぞれあけられている。

(a) 男 面

頭頂より約85mm.下方, 仮面仰置の水平面より, 孔の中心が約15mm.の高さの位置。

(b) 女 面

頭頂より約80mm.下方, 仮面仰置の水平面より, 孔の中心が約10mmの高さの位置。

(E) 結 語

浮嶋・石垣・竈門3社にある、『あまえご』と呼ばれている仮面を比較研究することにより、『あまえご』の源流・展開の考究への出発点としたものである。この仮面の民俗学的解明は、民俗学関係各位の御教示に待つとし、更により多くの同類仮面の採集調査の上に立ち、人体美学的に集約大成して行きたいと願っている。

後 記

不馴れの仮面研究に貴重な時間をさいて、御指導いただいた恩師西田教授をはじめ、この研究に御援助くださった各社の氏子総代並びに関係者、小石光・三浦庄司・三浦金吾・近藤徳美・安部利夫・古屋稔・佐藤伊一郎・伊藤竜蔵・恒松利行の各氏、そして写真撮影等に御支援助くださった当学河野公記氏に深く感謝の意を捧げるものである。

Ⅲ 参考文献

- 西田正秋著 美術解剖学論攷  
 同 上 顔の形態美  
 岡嶋敬治 岡嶋解剖学  
 金子良運 仮面の美  
 志手 環編 豊後速見郡史  
 総代会編 八幡石垣宮縁記  
 自治会

Tab. I 浮嶋八幡蔵仮面・寸法・計測・一覧表 小野一郎計測

図版 (Fig.)	付 号	仮 面 部 位	mm.	備 考
27	a b	仮 面 縦 径	225	
〃	c d	〃 最大横径	142	
〃	e f	右 眼 横 径	35	くられている部分.
〃	g h	〃 縦 径	14	efの中心附近でefと直交する径.
〃	i j	左 眼 横 径	35	くられている部分.
〃	k l	〃 縦 径	17	ijと直交する最大径.
〃	m n	鼻 巾	45	鼻翼間最大巾
〃	o p	開 口 巾	52	左右口角外方間
〃	q r	開 口 上 下 径	17	開口上唇・下唇間 (正中線附近)
〃	s t	上 歯 横 径	7	右より3本目.
〃	u v	〃 縦 径	7	同 上
28	a b	前 額 高	66	仮面仰置の水平面よりの高さ.
〃	c d	眼 球 高	48	想定眼球の仮面仰置の水平面よりの高さ.
〃	e f	鼻 高	69	仮面仰置の水平面よりの高さ.
〃	g h	上 唇 高	58	〃
〃	i j	下 唇 高	56	〃
〃	k l	上 唇・頤端間	62	
〃	m n	下 唇・ 〃	51	

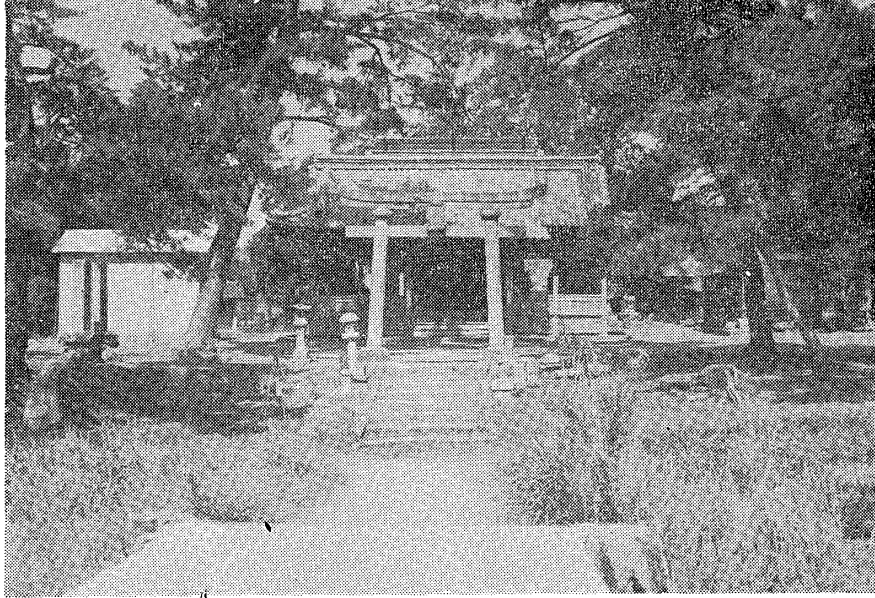
Tab. II 八幡石垣社 蔵仮面 (男面)・寸法・計測・一覧表 小野一郎計測  
 八幡竈門神社

図版 (Fig.)	付 号	仮 面 部 位	石垣面 mm.	竈門面 mm.	備 考
29・33	a b	仮 面 縦 径	192	212	
〃 〃	c d	〃 最大横径	147	149	
〃 〃	e f	右 眼 横 径	39	35	石垣面は内外眼角を、下眼瞼の延長と上眼瞼の交点により推想.
〃 〃	g h	〃 縦 径	20	20	efの中心附近でefに直交する径.
〃 〃	i j	左 眼 横 径	39	33	石垣面は右眼横径時に同じ.
〃 〃	k l	〃 縦 径	19	13	ijの中心附近でijに直交する径.

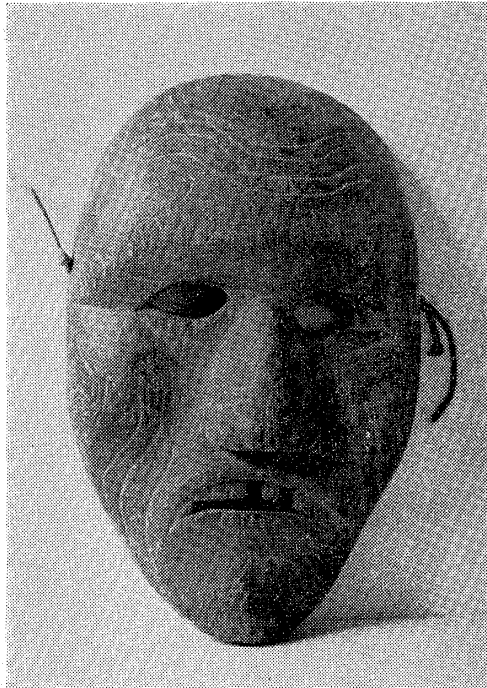
図版 (Fig.)	付 号	仮 面 部 位	石垣面 mm.	竈門面 mm.	備 考
29・33	m n	虹 彩 横 径	12	10	石垣面, 左虹彩は横径12mm. 縦径13mm.
〃 〃	o p	〃 縦 径	14	10	竈門面, 左虹彩は横径8mm. 縦径8mm.
〃 〃	q r	鼻 巾	53	62	鼻翼間最大巾
〃 〃	s t	口 巾	24	24	左右口角外方間
30・34	a b	前 額 高	62	64	仮面仰置の水平面よりの高さ.
〃 〃	c d	眼 球 高	53	59	〃
〃 〃	e f	鼻 高	68	73	〃
〃 〃	g h	上 唇 高	65	67	〃
〃 〃	i j	左口角・頤端間	50	57	
〃	u v	前額こぶ横径	35		
〃	w x	〃 縦径	33		
〃	y z	仮想正常口巾	54		

Tab. III 八幡石垣社 蔵仮面(女面)・寸法・計測・一覧表 小野一郎計測

図版 (Fig.)	付 号	仮 面 部 位	石垣面 mm.	竈門面 mm.	備 考
31・35	a b	仮 面 縦 径	195	218	
〃 〃	c d	〃 最大径	130	148	
〃 〃	e f	右 眼 横 径	35	45	石垣面は内外眼角を, 下眼瞼の延長と上眼瞼の交点により推想.
〃 〃	g h	〃 縦 径	11	10	efの中心付近でefに直交する径
〃 〃	i j	左 眼 横 径	35	47	石垣面は右眼横径時に同じ.
〃 〃	k l	〃 縦 径	13	7	ijの中心付近でijに直交する径.
〃 〃	m n	虹 彩 横 径	11	10	石垣面・左虹彩は横径11mm. 縦径13mm.
〃 〃	o p	〃 縦 径	11	7	竈門面は形態のよい左眼球の計測値.
〃 〃	q r	鼻 巾	32	32	鼻翼間最大巾
〃 〃	s t	口 巾	29	48	左右口角外方間
32・36	a b	前 額 高	57	70	仮面仰置の水平面よりの高さ.
〃 〃	c d	眼 球 高	51	59	〃
〃 〃	e f	鼻 高	73	82	〃
〃 〃	g h	上 唇 高	59	65	〃
〃 〃	i j	下 唇 高	56	61	〃
〃 〃	g l	上唇・頤端間	58	62	
〃	u v	上 歯 横 径		5	右より4本目
〃	w x	〃 縦 径		5	〃



Fig・1 浮嶋八幡正面景観



Fig・2 浮嶋面・前面

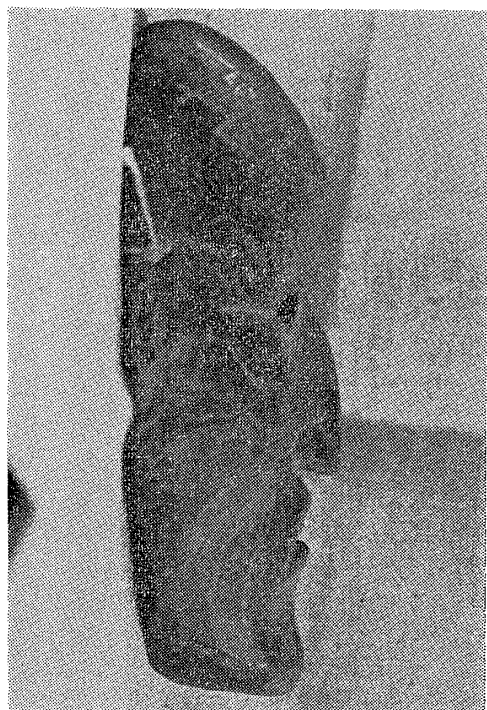


Fig. 3 浮鳴面・右側面



Fig. 4 浮鳴面・左側面

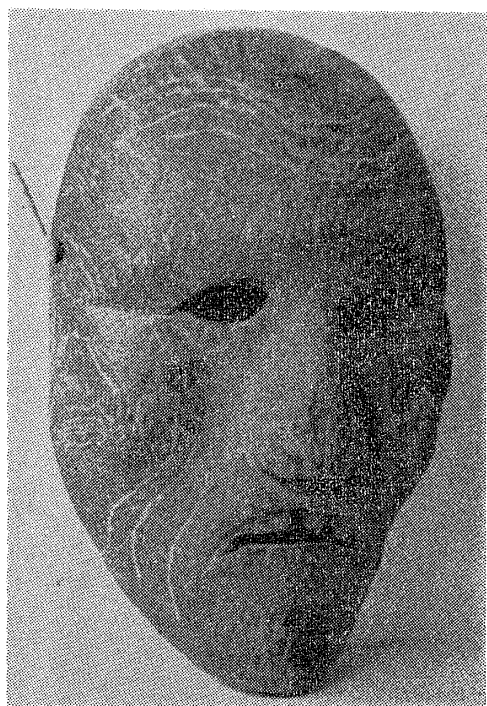
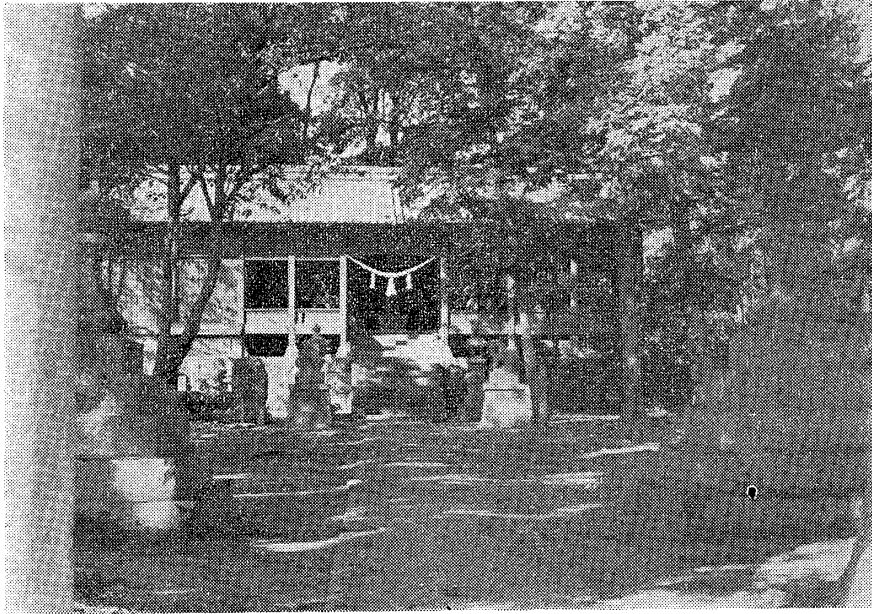


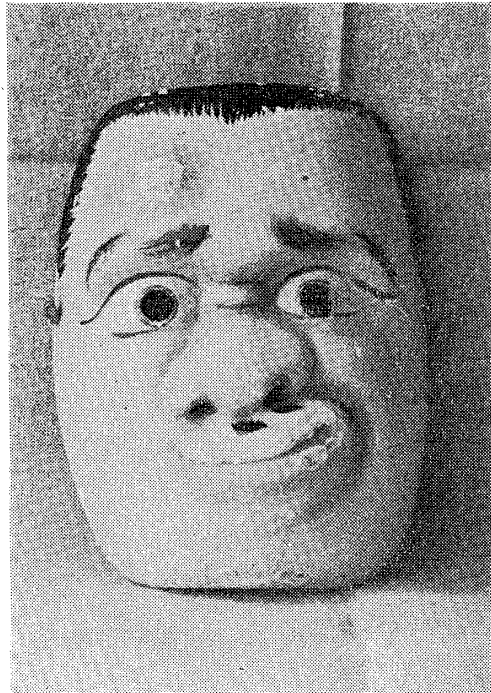
Fig. 5 浮鳴面・右斜側面



Fig. 6 浮鳴面・裏面

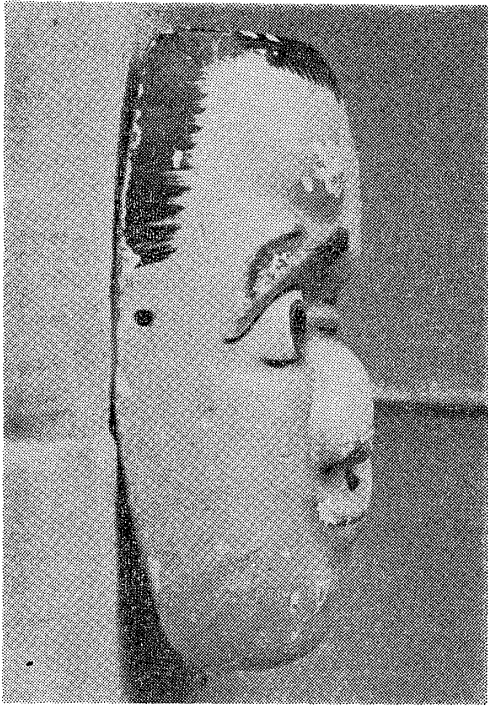


Fig・7 八幡石垣社・正面景観

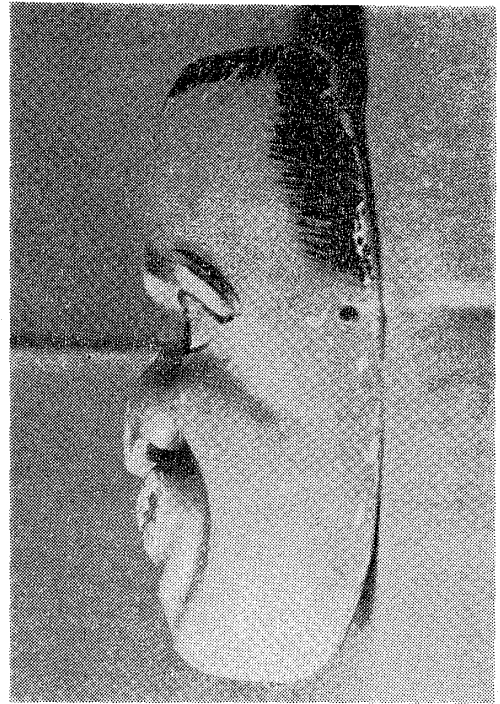


Fig・8 石垣面(男)・前面





Fig・9 石垣面 (男) ・右側面



Fig・10 石垣面 (男) ・左側面

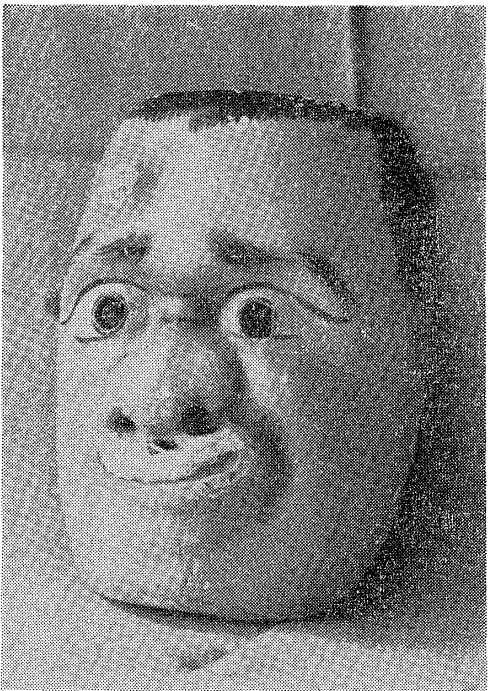
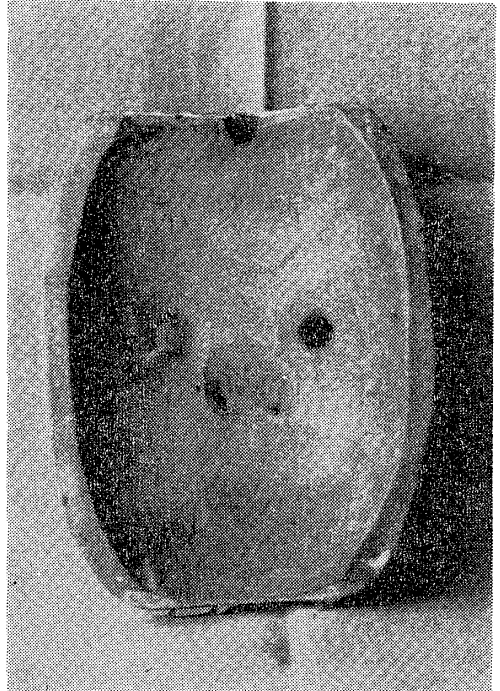
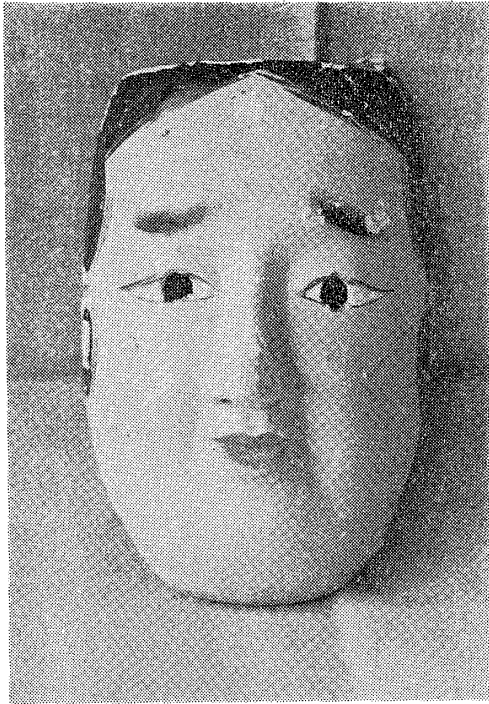


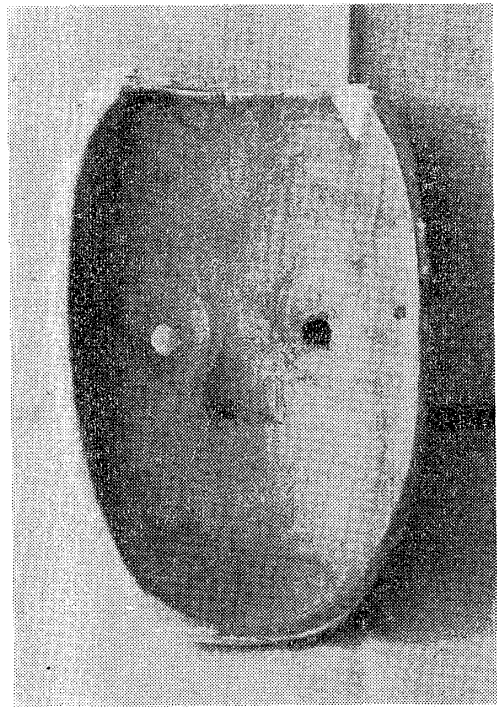
Fig11 石垣面 (男) ・左斜側面



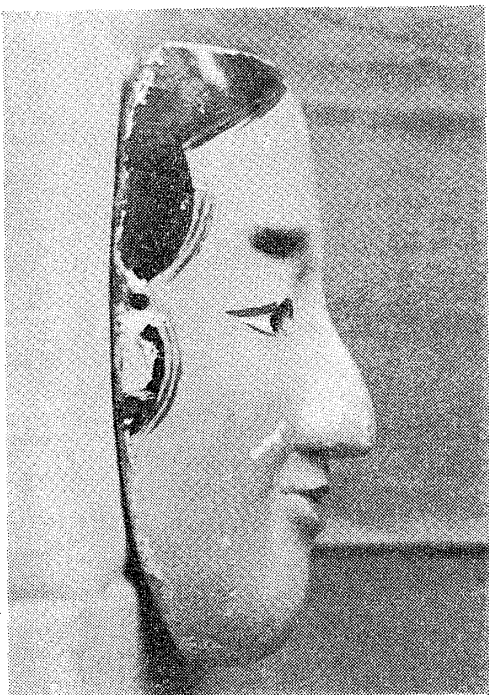
Fig・12 石垣面 (男) ・裏面



Fig・13 石垣面(女)・前面



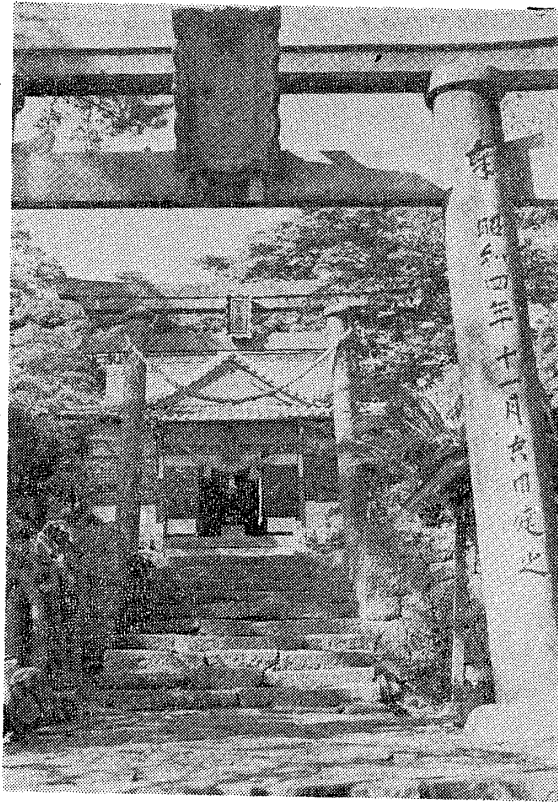
Fig・14 石垣面(女)・裏面



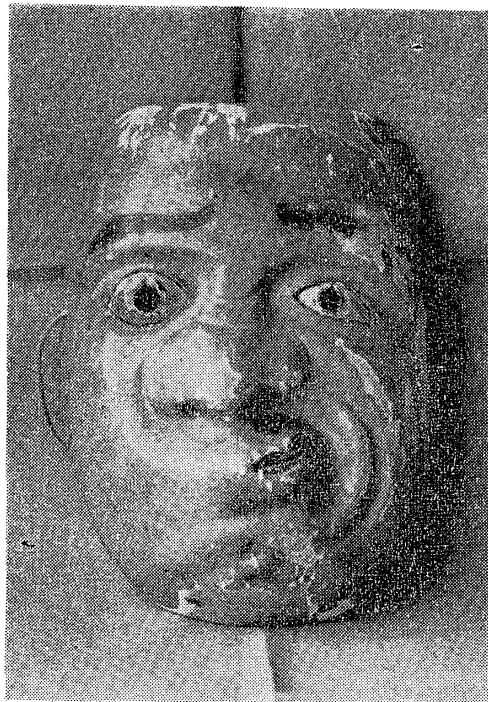
Fig・15 石垣面(女)・右側面



Fig・16 石垣面(女)・左側面



Fig・17 八幡竈門神社・正面景観



Fig・18 竈門面(男)・前面





Fig. 19 竈門面 (男) ・右側面

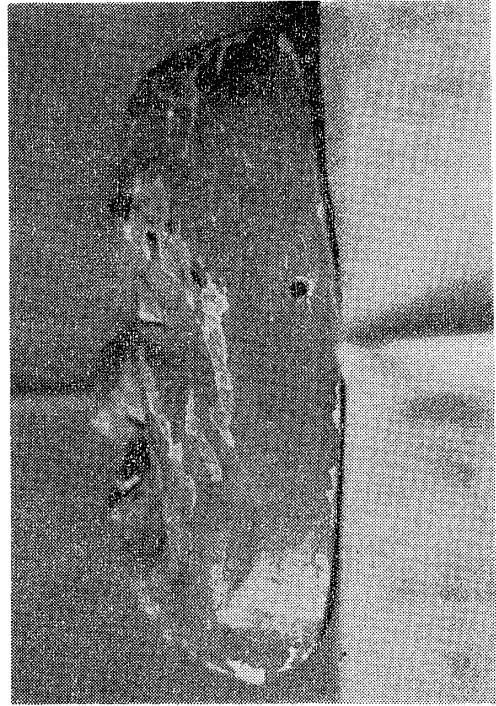


Fig. 20 竈門面 (男) ・左側面

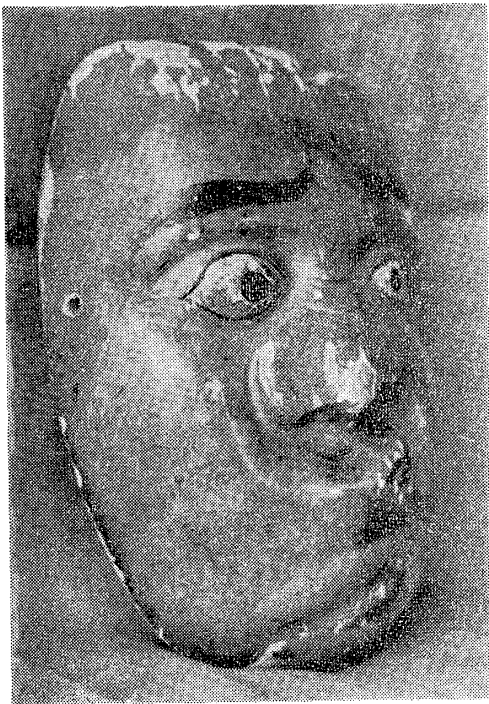


Fig. 21 竈門面 (男) ・右斜側面



Fig. 22 竈門面 (男) ・裏面



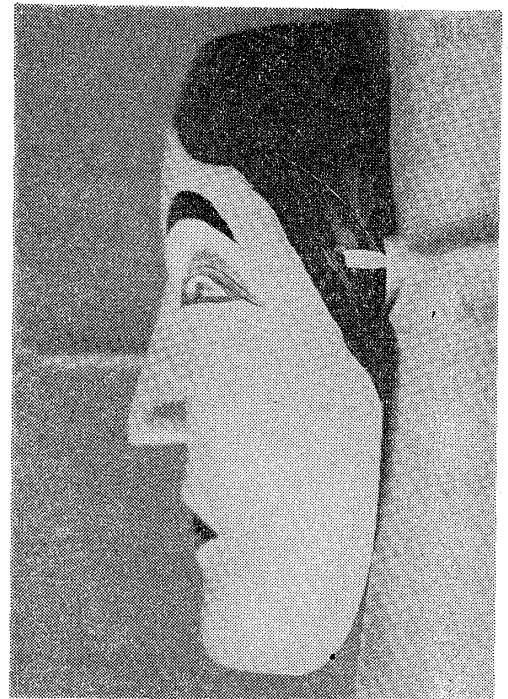
Fig・23 竈門面 (女) ・前面



Fig・24 竈門面 (女) ・裏面



Fig・25 竈門面 (女) ・右側面



Fig・26 竈門面 (女) ・女側面

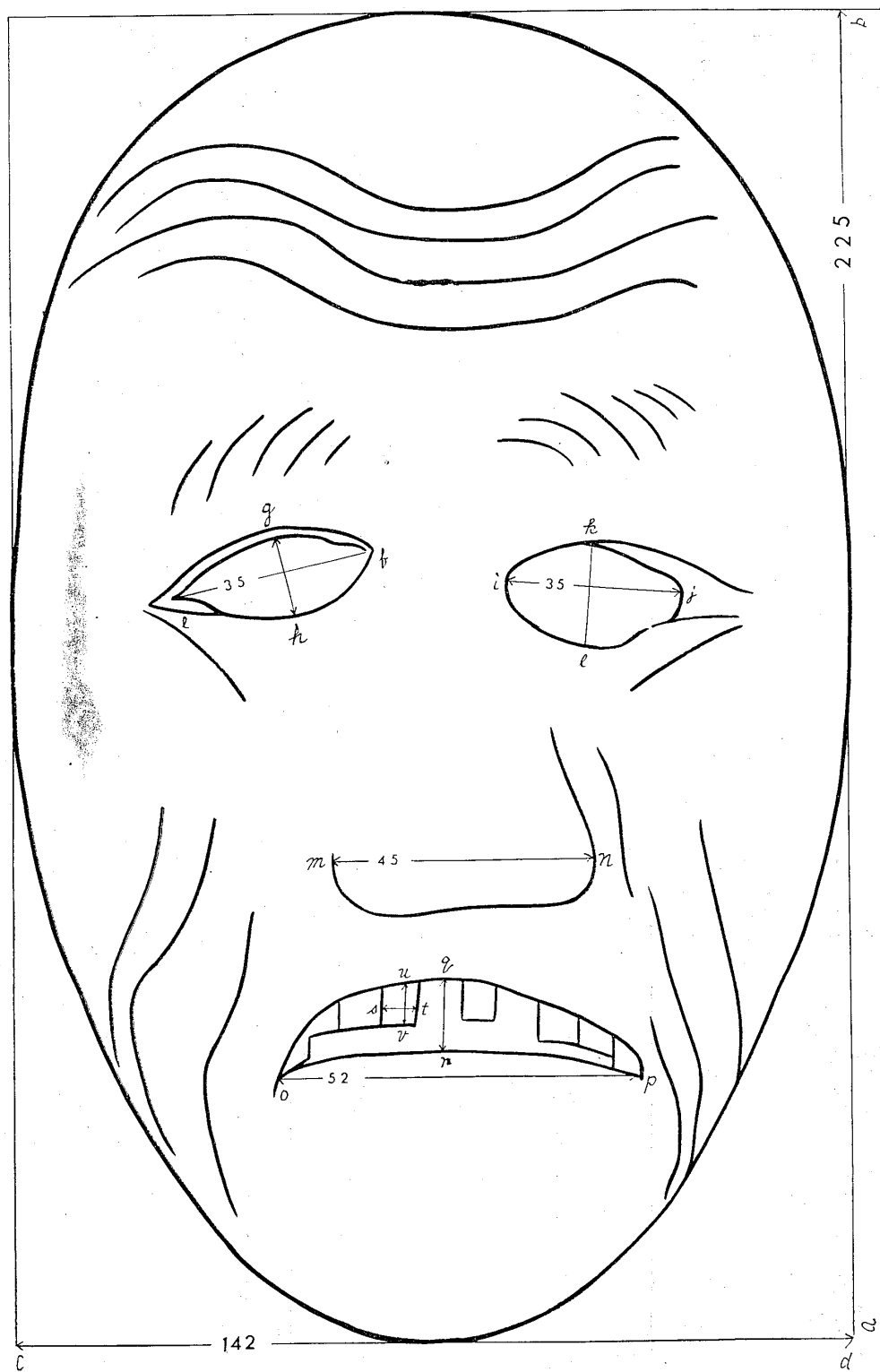


Fig.27 浮嶋面・前面図 原図実物 $\frac{1}{4}$ ×凸版 $\frac{2}{3}$  小野一郎原図

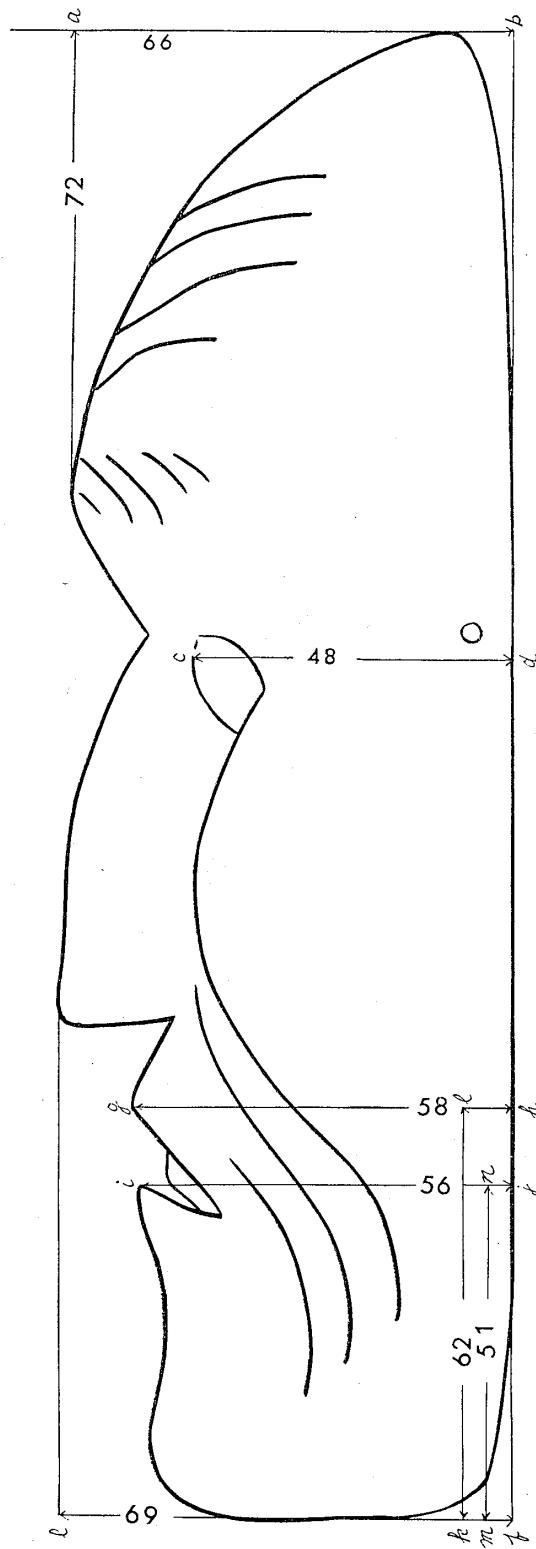


Fig.28 浮嶋面・左側面図 原図実物 $\frac{1}{4}$ ×凸版 $\frac{2}{3}$  小野一郎原図

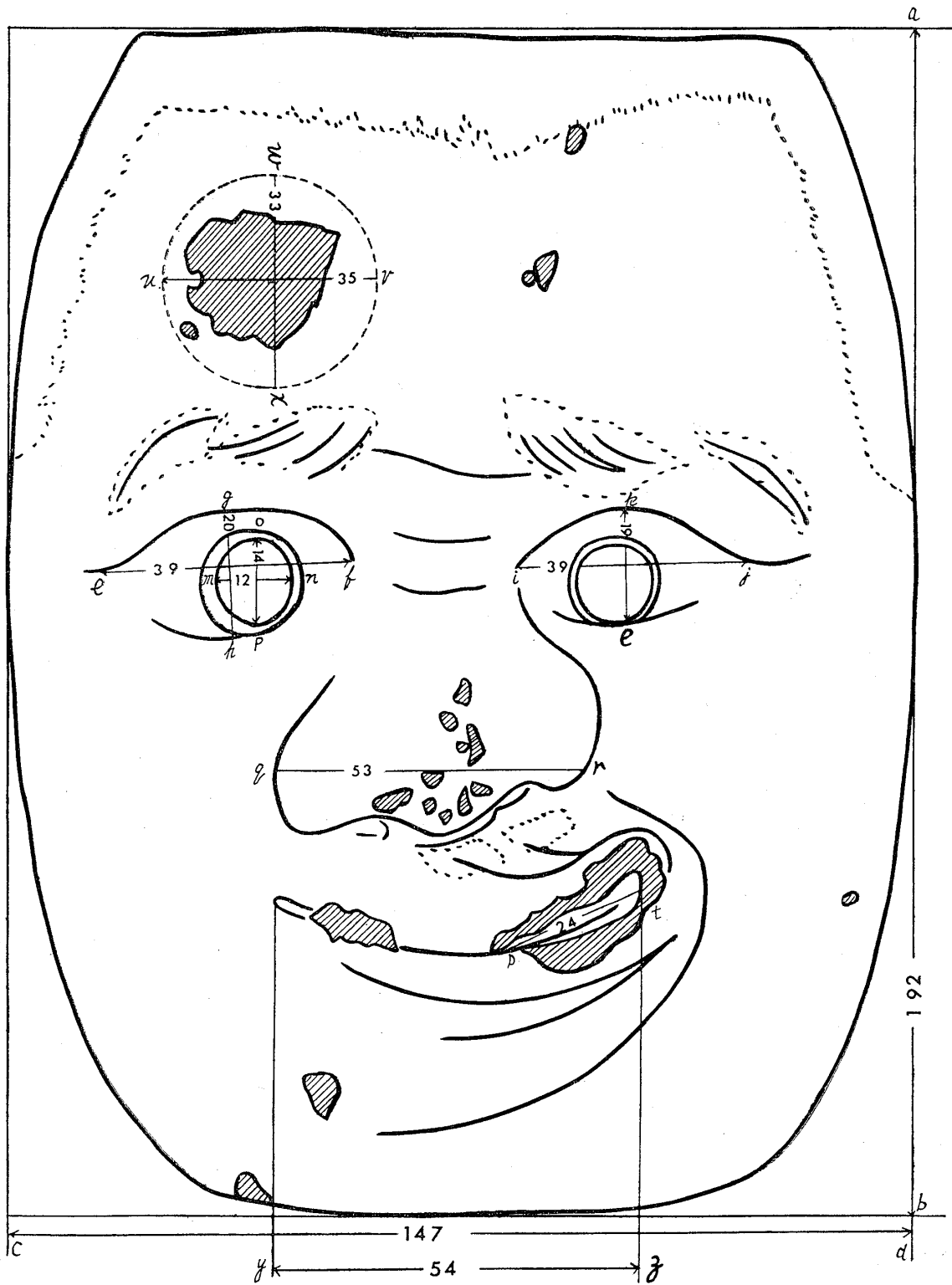


Fig.29 石垣面(男)・前面図 原図実物 $\frac{1}{4}$ ×凸版 $\frac{2}{3}$  小野一郎原図

凡例  剝脱部分

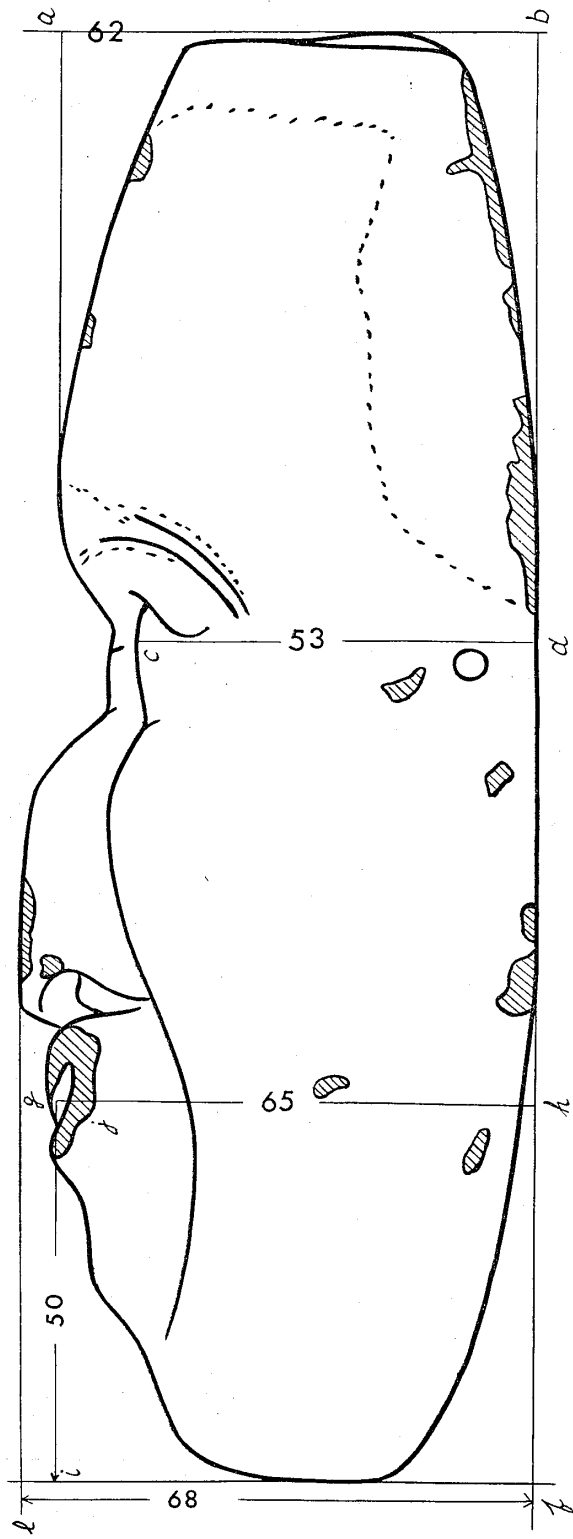


Fig.30 石垣面(男)・左側面図 原図実物 $\frac{1}{4}$ ×凸版 $\frac{2}{3}$  小野一郎原図

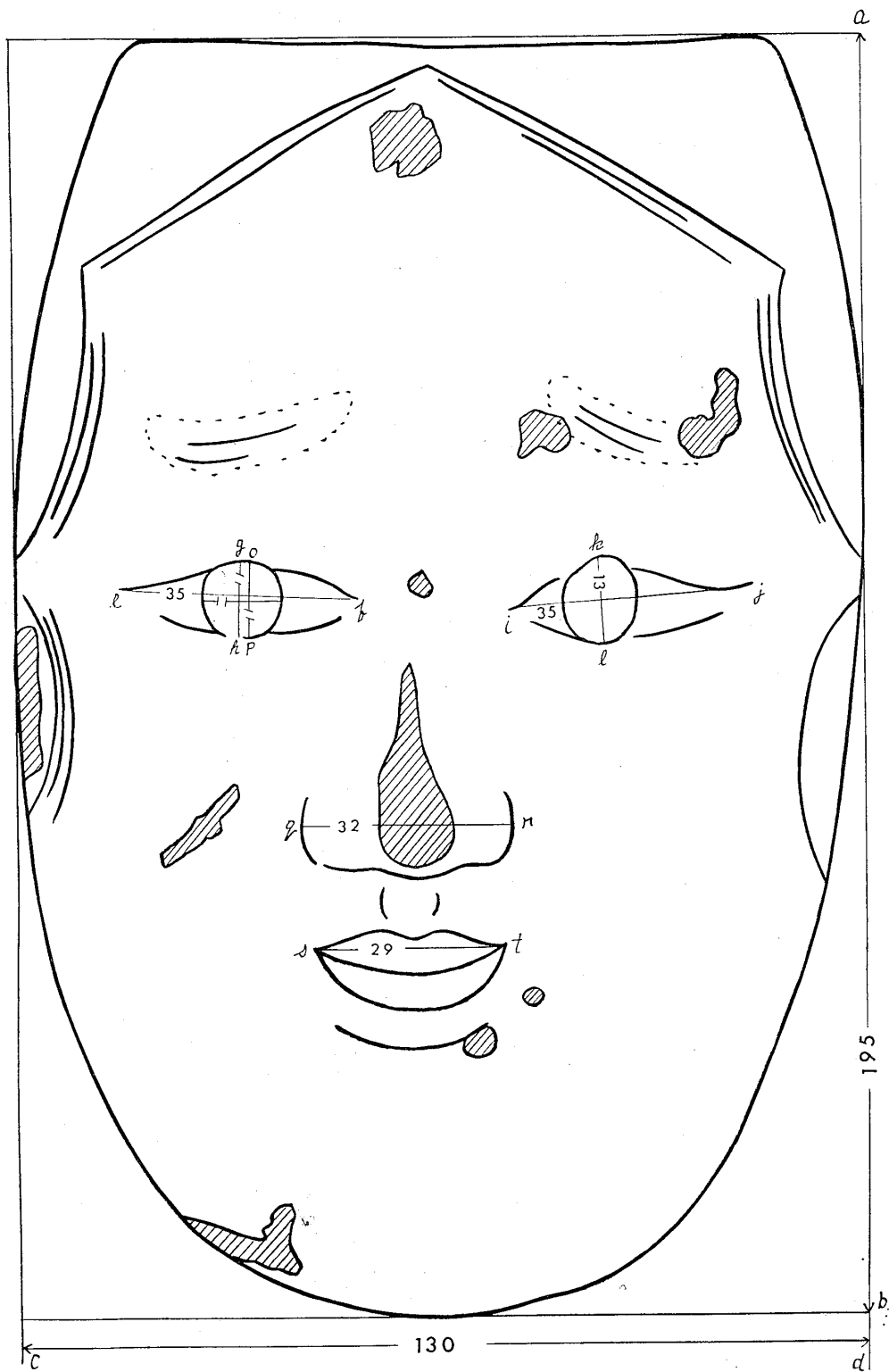


Fig.31 石垣面(女)・前面図 原図実物 $\frac{1}{4}$ ×凸版 $\frac{3}{8}$  小野一郎原図

凡例  剥脱部分

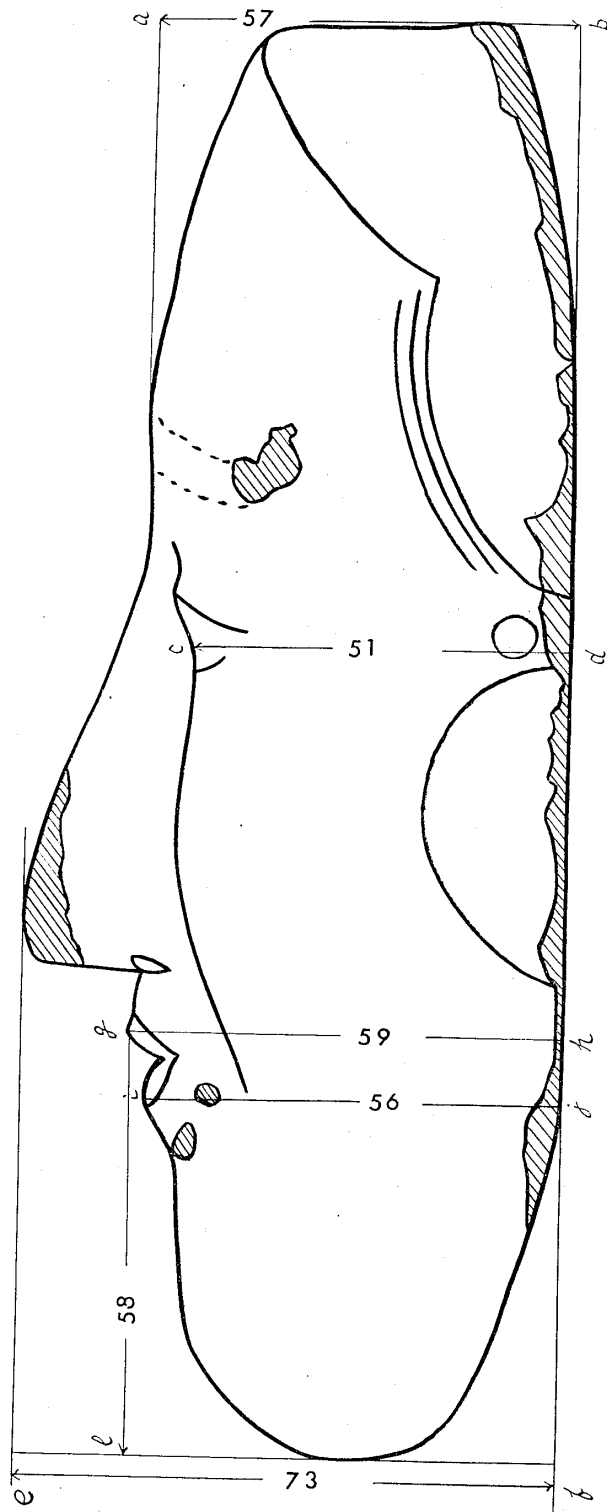


Fig.32 石垣面(女)・左側面図 原図実物 $\frac{1}{4}$ ×凸版 $\frac{2}{3}$  小野一郎原図



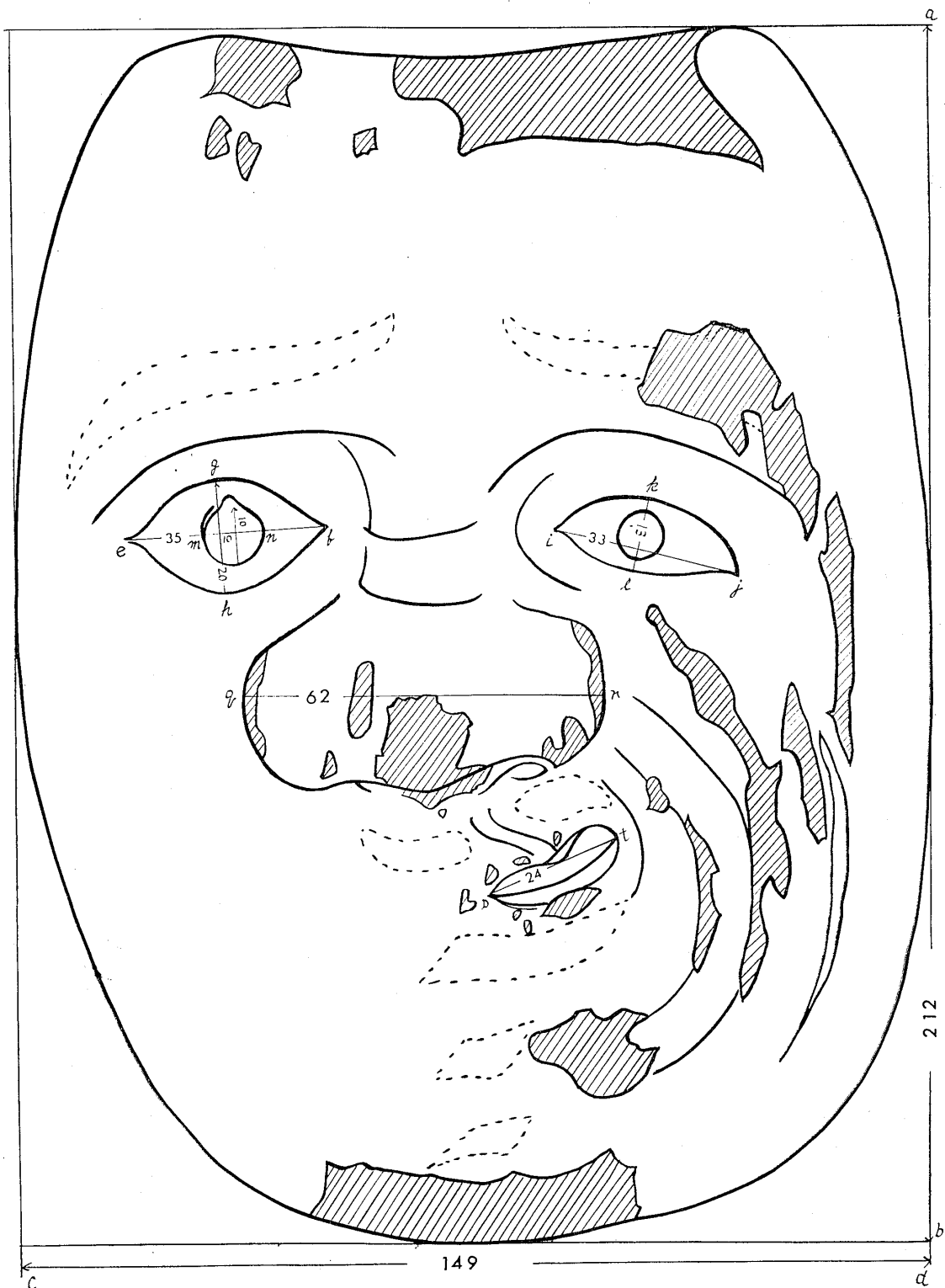


Fig.33 竈門面(男)・前面図 原図実物 $\frac{1}{4}$ ×凸版 $\frac{2}{3}$  小野一郎原図

凡例  剥脱部分

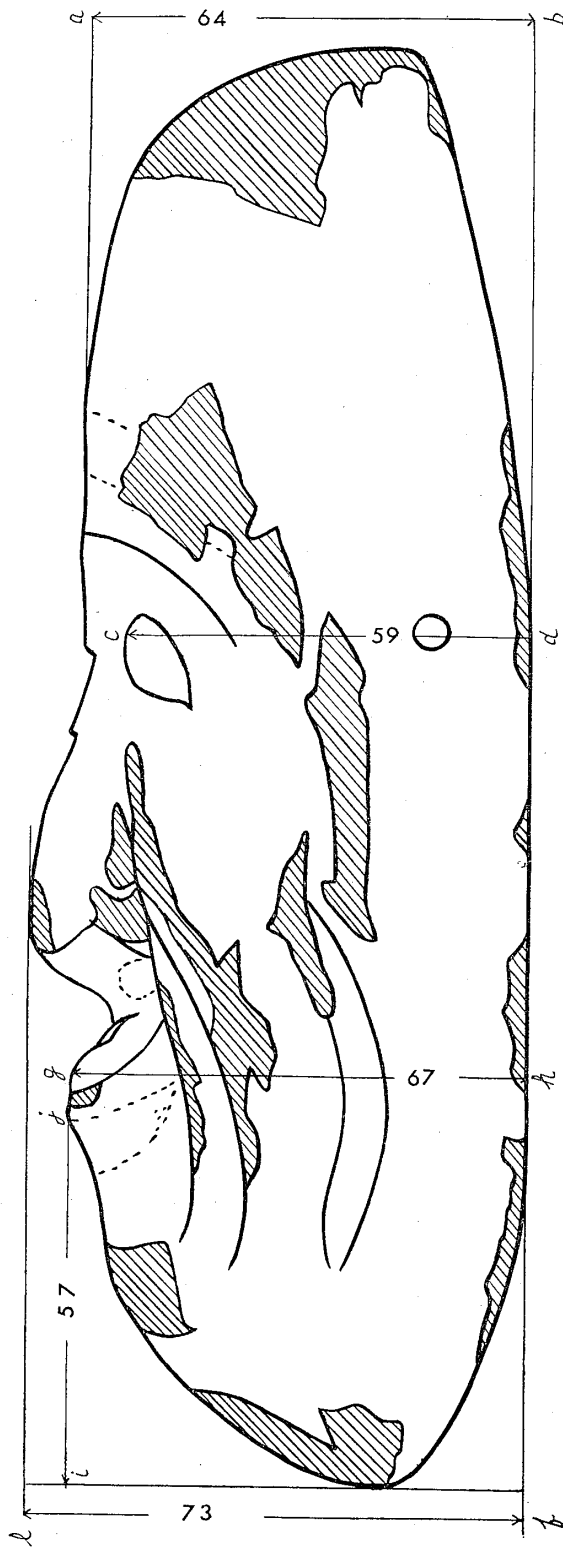


Fig.34 竈門面(男)・左側面図 原図実物 $\frac{1}{4}$ ×凸版 $\frac{2}{3}$  小野一郎原図

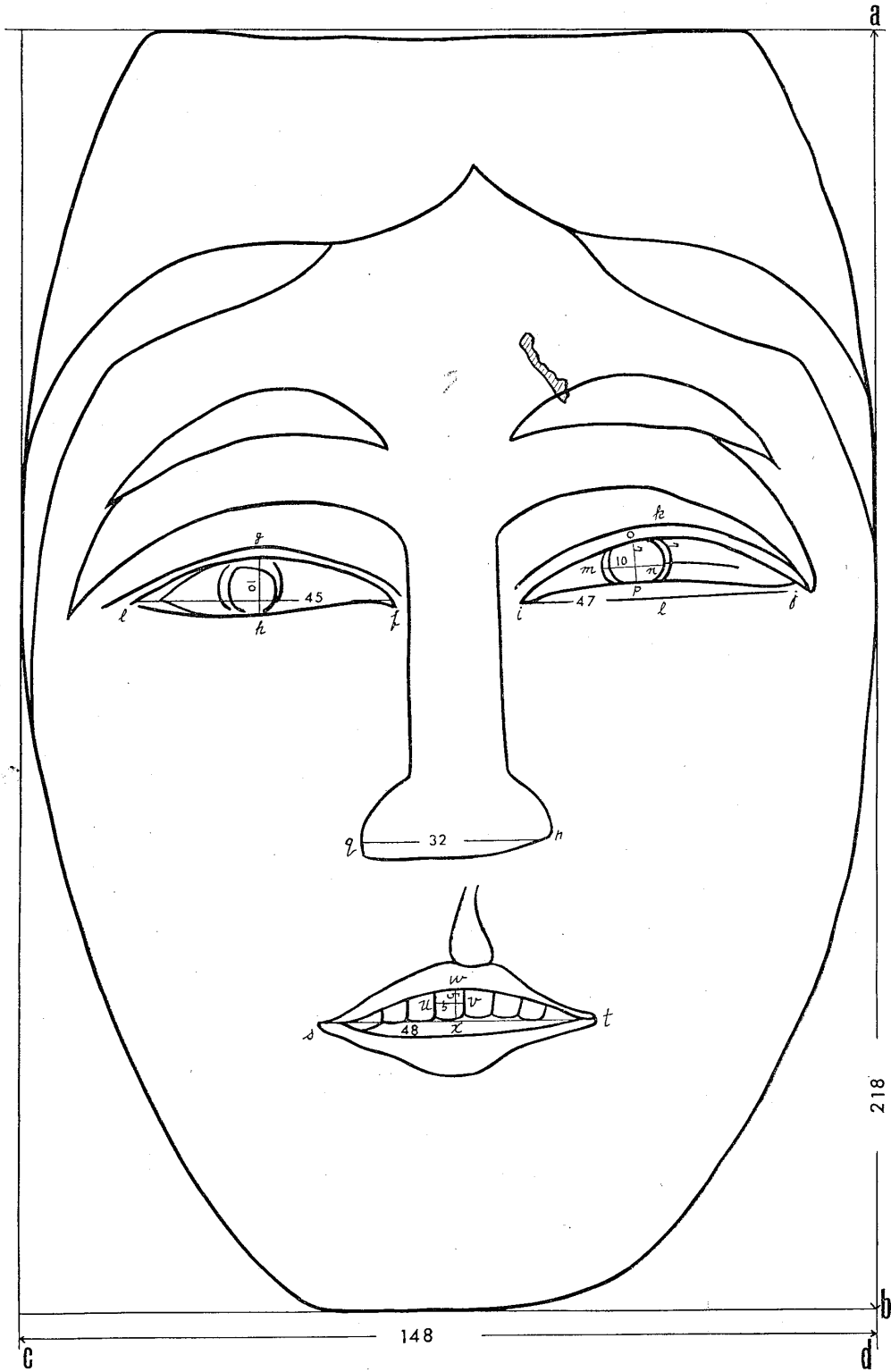
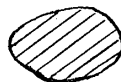


Fig.35 竈門面(女)・前面図 原図実物 $\frac{1}{4}$ ×凸版 $\frac{2}{3}$  小野一郎原図

凡例  剝脱部分

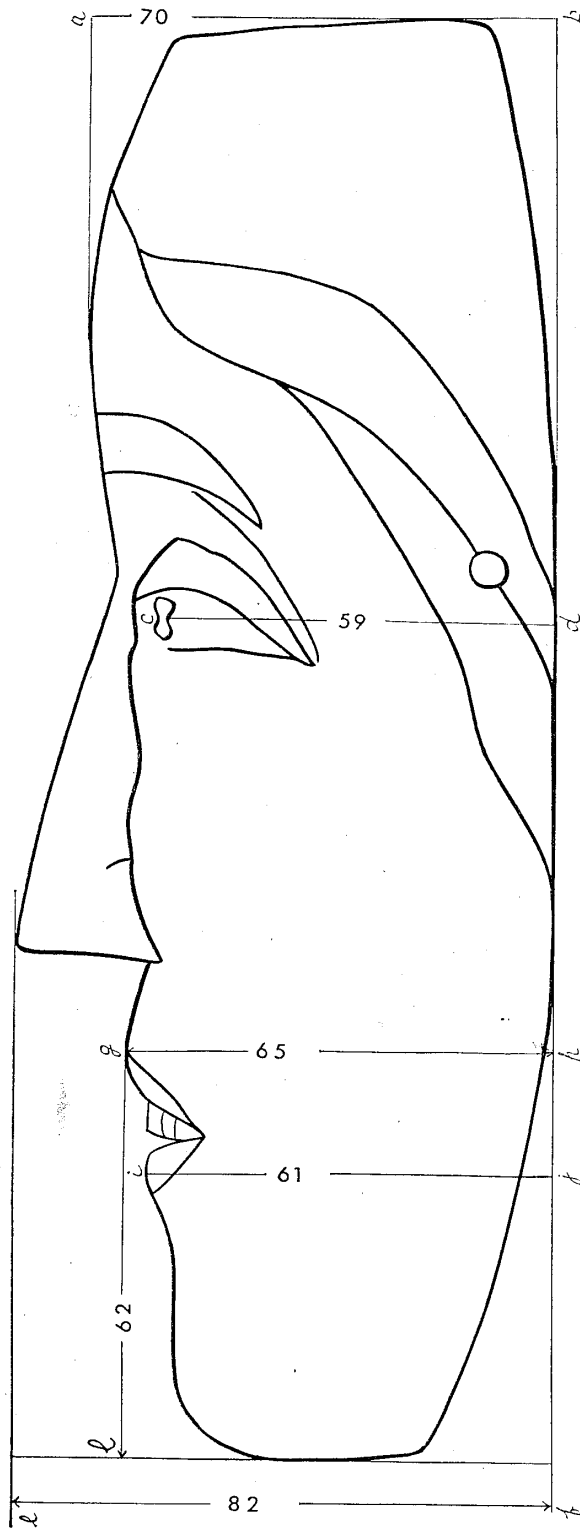


Fig.36 竈門面(女)・左側面図 原図実物 $\frac{1}{4}$ ×凸版 $\frac{2}{3}$  小野一郎原図